

NEWS



陸協ひろしまニュース
財団法人 広島陸上競技協会

第65号

為末

現役貫き通す

侍ハードラー

大



陸上人

男子障害

FILE006

為末 大

APF

Dai Tamesue

現役貫き通す 侍ハードラー

プロフィール | 為末 大(ためすえ・だい)

1978年5月3日生まれ/広島市佐伯区五日市出身/170cm/67kg/広島市立五日市中
-広島皆実高-法政大/大阪ガス-APF・TC

主な成績

1991年・広島市中学総体200m1位/1992年・全日本中学校選手権2年100m7位、ジュニア五輪Cクラス100m4位/1993年・全日本中学校選手権100m、200m1位、国体少年B200m2位、ジュニア五輪Bクラス200m1位/1994年・日本ジュニア選手権200m4位、国体少年B100m、400m1位/1995年・ジュニア五輪Aクラス200m7位/1996年・全国高校総体200m4位、400m1位、世界ジュニア選手権400m4位、国体少年A400m1位、400mH1位/1998年・日本インカレ400mH1位、国体成年400mH3位/1999年・日本インカレ400mH1位、日本選手権400mH1位、国体400mH1位/2000年・日本インカレ400mH1位、シドニー五輪400mH予選8組8位、日本選手権400mH2位/2001年・日本選手権400mH1位、エドモントン世界選手権400mH3位/2002年・日本選手権400mH1位、釜山アジア大会400mH3位/2003年・日本選手権400mH1位、パリ世界選手権準決勝2組7位/2004年・アテネ五輪準決勝2組3位/2005年・ヘルシンキ世界選手権400mH3位/2007年・大阪世界選手権予選3組6位/2008年・北京五輪予選4組4位

「侍ハードラー」と人は呼ぶ。そげ落ちたほお、勝負の前の厳しい表情は古武士をほうふつとさせる。だが、レースを離れた「大ちゃん」は、人懐っこい笑顔で魅了する。中学3年で、その年の6種目の記録リストトップを占めた怪物スプリンターは、世界選手権で2個の銅メダルを獲得するまでに成長。31歳の今も、現役ハードラーとしてのこだわりと競技への熱い思いを抱き続けている。

(公式ホームページ「侍ハードラー」や各種のインタビューなどを基に構成した)



退路断ち、拠点に米西海岸へ

2月24日に日本を立ち、カリフォルニア州サンディエゴで復活を期して、トレーニングに励んでいる。東京の住まいは引き払い、カリフォルニア大サンディエゴ校を拠点に、アメリカン・ライフに浸っている。ひざの状態は相変わらず思わしくはない。試行錯誤しながらの取り組みが続いた。5月には31歳になった

海外移転は現役続行を決めた時点でほぼ気持ちを固めた。昨年春、一人で練習していたけどでも集中できた。中学や高校の時みたいに、誰も知らないところで、速く走ることを考えたいと思った。30年なんて、あつという間だった。振り返ると走っていない記憶がほとんどない。

昨年の夏は失意に沈んだ。3度目のオリンピックとなる北京五輪に出場した。しかし、結果は無惨なものだった。8月15日、1次予選4組に臨み49秒82で4位、次のラウンドには進めなかった。前年の大阪世界選手権に続いて、最初のレースで姿が消えた。最終日の22日、法大の後輩、金丸祐三の故障に伴い久々にマイルリレーの2走を務めた。気力を振り絞ったものの浮上できなかった。この日、400mリレーで日本が悲願の3位ゴール。スタンドで見守った両目から涙があふれ出た。

アテネ五輪が準決勝で終わった後、ひどくむなしかったのを覚えている。あれから4年、決勝の舞台に焦がれてきた。北京ではずっと緊張したまま前日を迎えた。レース前にあれほど緊張したのは中学2年の全日中以来だった。前半はうまく飛ばしたが、200mをすぎて体が重くなった。最後は体が動かなくなった。もがくような直線だった。いかんせん、あれが精いっぱいだった。私なりにできることは全てやったつもりだった。

*

「走り続けたい」と現役続行

北京のレース後、多くの人は「引退」を予期した。シーズン中もけがに悩まされ、奇跡的に五輪切符を手に入れた。左ひざ、左アキレス腱、右ひざ、腰…。酷使してきた体は随所で悲鳴をあげている。しかし、不屈のハードラーは「現役続行」を選択した。やり残したことへの再挑戦の決意を口にしたのは10月1日だった。

コーチとして見れば、ここが引き際かもしれない。頭では分かっているが、走りたい気持ちには逆らえない。負けても気にならない心境になった。ポロポロになってでも走ることは幸せなことと思ひ、行けるところまで行こう。負けるところまで走って、ヨーロッパの片隅の

記録会で終わっても自分らしいのではないか。

思えば、9歳にして目標をカール・ルイス(米国)に定めた。1980-90年代に光彩を放ったスプリンター。ルイス目指して少年為末は破竹の勢いでグラウンドを疾走した。200m中学記録(21秒36)、400m障害ジュニア記録(49秒09)は、今もさん然と輝きを放つ。大学4年でシドニー五輪を経験した。実業団に進み、恵まれた練習環境の中で競技に打ち込んだ。しかし、安住する気持ちに決別し、自らを厳しい立場に追い込んだ。社会人2年目の秋にはプロに転じ、アジア・パートナーシップファンド(APF)と契約。一方で、メディアへの露出を通じて「陸上広報マン」を任じ、著作も3冊。陸上人としては異色のマルチタレントである。

ヨーロッパを転戦してみようと思ったのは、プロである外国選手に勝つにはまず同じ土俵に上がらねば勝てない、ということだった。周囲からは反対されたが、大きな成果を得るためには高いリスクを背負わなければならないことは明白だと考えた。この世界は弱肉強食、実力勝負。結果が全ての単純明快な図式は、私の闘争本能をかき立てる魅力があった。



再起へ向け、決意は衰えず

ベルリン世界選手権への代表切符がかかる今回の日本選手権会場、古里の広島ビッグアリーナはハードラー為末の原点である。1996年秋、地元の広島国体でヒーローとなった。少年男子A400mを45秒94のジュニア新記録で駆け抜けた。わずか3度目のレースで臨んだ400m障害は、世界ジュニア歴代3位に位置するハイレベルな記録をマークした。毎年の織田記念陸上では地元の温かい声援が後押しする。実家も近い。だが、決戦の場に為末の姿はない。満足なコンディションが得られず、やむを得ず出場を断念したのである。無念の胸中であろう。リセットした後、やがて一回り進化した勇姿がもどってくるはずだ。「再起」への意気込みは薄れてはいない。

世の中の期待値と、自分が思っているギャップが離れていくときに、モチベーションが沸く。もう一回、世の中がびっくりするようなことをしたい。最近ではスタンドからしか見えていない決勝の舞台に立ちたい。(敬称略) (W)

身長わりにはとても手脚の長い、ちゃめっけたっぷりで、笑顔が可愛い少年に会ったのは、もうかれこれ20年近くも前のことである。当時12歳だった少年は、今年5月で31歳になった。中学校に入学してきた時、彼は松葉杖をついていた。そして、夏までは走らないという約束を守り通した。その間、彼は基礎体力づくりと速く走るための専門的体力づくりに、ひたすら取り組んだ。誰よりも速く走りたいという思いが人一倍強い彼にとっては過酷な日々だったかもしれない。しかし、目標を見定め、未来に向かって今はどうすべきかを知っていた彼はそれに耐え抜いた。長い我慢の期間を経て、スパイクを履いて初めて走ったレースは雨の中の200m。土のグラウンドを跳ぶように大きなストライドでぐいぐい走る姿は、まるで両親にクリスマスプレゼントで大好きな物もらった時のように満面に笑顔の表情だった。時々、当時1年生の

時の彼の担任の先生に会う。心優しいその男性の先生は、いつもの優しい表情をもとくずしながら、当時の彼のことを語る。ちゃめっけたっぷりの彼の笑顔を語る。そして、今もなお彼にエールをおくる。

20年近くも走り続けてきた彼の身体はおそらくもう限界近くにきているだろう。自分の筋肉や腱に語りかけながら走り続けてきた彼にはそのこともわかっている。それでも、なお彼は走り続けている。そして、私達ももう少し走り続けて欲しいと願っている。ただ違うのは、中学生時代を知っている私達は、正直言っても1番になるためのみに走って欲しいとは思っていない。走っている時の真剣で野性味のある研ぎ澄ました表情と走る姿、そして、走り終わった後のくったくのないあの満面の笑顔が見たいのである。

三和中学校 校長 河野 裕二

第93回日本陸上競技選手権大会—広島陸協の挑戦—

とうとう、いや、やっと「日本選手権」広島開催にこぎつけた。2004年当時、広島ビッグアーチに勤めていた大神氏とは広島アジア大会で一緒に事務局で働いた旧知の仲であった。大神氏から、「陸上も何かビッグイベントを誘致してくださいよ」と言われた瞬間に目が覚めた気がした。1994年の広島アジア大会から本格的に広島陸協のお手伝いを始め、1996年の広島国体も運営を手伝った。その後もスポレクのマスターズ陸上があるとすれば三重県の伊勢神宮まで事前の視察へ出かけ、全中の前年には長崎の大会を視察するなど、数々の全国大会を広島で開催するに当たっては現在の東川専務理事、竹林審判委員長らと準備の段階から協力し開催の条件整備などを手がけてきた。

しかし、すべて他の主催団体によって広島開催が決まってからの動きであり、本協会が主体的に動いて誘致してきたわけではない。

広島は毎年全国規模の「織田陸上」を開催しており日本陸連からは競技運営について信頼を得ている。また、「全国都道府県対抗男子駅伝競走大会」についても、その広島の運営能力が認められて、広島での開催になったと聞いている。

私が役員に就いてからは、このように全国的に有数の競技運営能力を誇る本協会がこれまで日本陸連主催の全国大会については誘致した記憶がない。

その思いが日本選手権の誘致を決断させた。

といっても、私にはそのような力量はない。当然、夢物語で終わるはずであった。折しも、その年、鳥取の布勢陸上競技場では「日本選手権」が行われた。

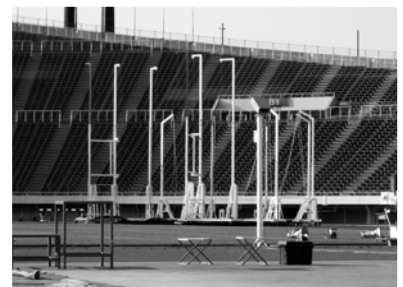
さてさて、どうしたものか、と思いつつ悩みながら東川専務理事と広島陸協の副会長で現在の日本陸連三宅副会長にも相談を持ちかけた。話題にはあがるが、なかなか前に進まない話であった。先に「全国レディース大会」が決まり、2006年から2年間広島開催を手がけた。この大会はコカ・コーラウエスト広島スタジアムで行った。その頃、東川専務理事の耳にも、広島ビッグアーチでのビッグイベントの誘致について広島市からの話が届き、やっと本格的に動きが現れた。私の個人的な夢物語が広島としての組織的な誘致活動として具体化していくのであった。

2006年のインターハイは大阪で開催された。JTOとして陸連の控室にも入ることができるため、当時から陸連の理事であった三宅広島陸協副会長とともに「日本選手権の広島開催」について陸連役員に可能性をさぐることができた。その結果、広島開催の脈ありと判断。それからほとんど拍子にことが進んだ。地元は東川専務理事を中心に広島市やビッグアーチなど様々な組織、機関と連携をとり、調整を図り、早くも、次年の3月陸連の理事会・評議員会に申請書を提出し、内定をもらった。

2007年の日本陸上界は世界陸上大阪大会に終始した。本協会もジュニア視察であわただしく追われたが、今回の投てき主任である大林和彦先生(西農高校、県高体連委員会)を審判研修に派遣し、日本選手権を意識した取り組みは忘れなかった。準備はほとんど2008年からとなった。川崎市の等々力競技場での第92回日本選手権には大視察団を編成し各部署の責任者が有意義な視察を行うことができた。私が要望した実行委員会は実現しなかったが準備委員会を冬から行い遺漏のないように準備を進めてきた。直前は「メールのチェックで1日が終わる」と東川専務理事とつぶやきながら協力してもらえ、支えてもらえる周囲の方々に感謝しながら、書類作成を続けて今日を迎えることができた。

日本のトップアスリートの集う今回の日本選手権は第12回ベルリン世界選手権大会の予選会も兼ねている。6月28日で広島での日本選手権は終わるが、広島陸協の挑戦はこれからも続く。

特別委員会委員長 浜崎 正信



キッズアスリートプロジェクト IN 海田



4月30日(木)、織田幹雄さんの生誕の地である海田町の海田小学校のグラウンドで、キッズアスリートプロジェクトが開催された。

当日は、朝原宣治選手、吉形政衝選手、石川和義選手、岡山沙英子選手、畑瀬聡選手を迎え、全校生徒457名が参加し、開会。デモンストレーションでは、50m走、50mハードル、砲丸投、走幅跳、三段跳を各選手が披露。選手のパフォーマンスに歓声があがり目を輝かせていた。その後、グループ別にレッスン&トライ。選手から直接技術指導を受け、子どもたちの目は真剣そのものだった。最後は、選手とリレーでガチンコ対決。接戦の末、選手チームの勝ち! 大きな声援と歓声飛び交った。選手と給食をともにし、1日を締めくくった。

この日を記念してグラウンドへ桜の木を植樹した。この日のこの感動をきっかけに、偉大な選手が育ってくれることを楽しみにしたい。



夜は、会場を中電グラウンドへ移して、クリニックが開催された。佐藤敦之・美保ご夫妻、田子康宏選手、畑瀬聡選手、松田亮選手、石川和義選手を迎え、200人以上の小中高校生を対象にブロック別に約2時間汗を流した。

「トップアスリートに出会って」

海田小学校 6年 道本 祐毅

ぼくは、トップアスリートに出会ってすごいなあ、努力したらこんなに速く走ったり、すごく跳んだり、遠くへ投げたりできるんだなあと思いました。ぼくは、たとえ陸上選手やスポーツ選手にならなくても、何かひとつは努力してがんばりたいなあと思いました。

第43回織田幹雄記念国際陸上競技大会を終えて

競技面から

大会総務員 河野 裕二

トラックのオールウェザー舗装が新装されたビッグアーチで好記録が相次いだ。女子100mにおいては追い風参考記録ではあったが、日本記録に値する好記録が2つ誕生し、男子100mでも2人が世界陸上A標準を突破した。そして、地元勢が女子800mと女子3000mSCにおいて優勝したのも嬉しい成果であった。

第43回を迎えた織田記念陸上は、我々競技運営関係者にとって2つの意味で重要な大会であった。一つは、昨年の大会の反省から。もう一つはこの6月に同競技場で開催する日本選手権のため。早朝に実施した主任会議において、競技運営の原点に戻り、「なすべきことをきちんと行う」ことを再確認した。

競技運営の理想はあくまで一つ、競技運営に関わる競技役員全員がそれぞれの部署で責任を持って「なすべきことをきちんと行う」である。競技役員も「チームひろしま」である。そして、それそのものが「選手に

優しい競技運営」なのだと思う。その意味で今回の競技運営を振り返ってみると、各部署における技術的な面での課題はまだ出てきている。タイムテーブルそのものにその課題があったとも考える。多くを望むと小さなほころびがちらこちらに出て、バツと破けてしまいそうな危険性も感じた。しかし、原点に帰った競技運営を心がけることで、次回大会に向けてしっかりと見直さなければならぬ点がよく見えたのも事実である。具体的なことを個々に示せないが、きちんと検討し今後に生かしたいと思う。

さて、日本選手権に向けては、観客対応という面で多くの課題が残った。アナウンス・表彰・大型映像・フィールドと進行との連携などなど、観客にアピールする面での課題となった。当日は、これらを生かして大会を成功させたい。

運営面から

大会総務員 樋口 裕志

今年の大会を迎えるにあたり、ふたつの思いを胸に抱き大会運営に臨んだ。1つめは、今年広島で開催される日本選手権大会に向けて完璧なリハーサルを行うこと。そして2つめは、昨年の大会の競技運営上の失敗のリベンジを計りたいということだ。

今年の大会は昨年の反省課題を生かし、さすが広島ここにありという運営ができたのではないと思う。

しかし、日本選手権では、国体強化記録会、織田陸上で明らかになった課題を整理し大会運営できればと考えている。

昨年の日本選手権、日本選手権リレーの視察を通して、また、全国高校総体、国体、日本ユース・ジュニア大会へ参加したり、全国

高校駅伝の視察から、それぞれ開催場所の持ち味が出されている。ぜひ日本選手権に於いても、広島らしさである選手や観衆に優しい大会運営を心掛けていきたい。

日本選手権は、4日間開催ということもあり役員も大変だが、力を合わせて頑張っていきたい。大会に関わる大学生は、貴重な経験となるだろう。積極的に行動してみしてほしい。高校生の皆さんは、考查期間だが、これからの生活に役立つので、ぜひ学習用具を持参して頑張してほしい。

今年の織田記念大会は、昨年の大会のリベンジが果たせ日本選手権に向けて元気になれる大会運営ができた。

グリーンプロジェクト

事務局 樽谷 和子

グリーンプロジェクトは、環境や健康に配慮し、暮らしやすい社会をつくる取組みである。日本陸連が推奨しているJAAFグリーンプロジェクトでは、「選手に良い環境を」という主旨のもと昨年に続き、今年も織田幹雄記念国際陸上競技大会を記念して、サブグラウンド近くの緑地帯にハナミズキを植樹した。主催者を代表して広島陸協亀井郁夫会長が、後援を代表して日本陸連三宅勝次副会長が、また選手を代表して昨年のインターハイ男子4×400mRで優勝した広島皆実高校陸上部の浅井良太選手と建田勇太選手の4名が植樹した。

特に今回初めての大役を任せられた選手は、土入れで少し緊張気味ではあったがスムーズに土をかけ、植樹後はほっとした笑顔だった。

昨年植樹した「里桜」も緑の葉をいっぱいつけ元気に育っている。

今回のハナミズキは別名アメリカヤマボウシといわれ、ヤマボウシによく似ている。春の花木の代表的な花で4~5月に咲く。白い花のように見えるのは、葉が変化したもので、花を包んでいる部分なのだとか。秋の紅葉も見所である。



広島陸協は昨年度織田記念陸上と全国都道府県男子駅伝時の2回、今回で3回目の記念植樹となった。

年代別レポート

小体連

5月に全国小学生陸上競技交流大会の各地区予選が行われた。各都市陸協の皆様ありがとうございました。

私は5月10日の安芸郡予選に役員として、また、指導者として参加させていただいた。

毎年、安芸郡予選は、中学生・高校生・一般も参加する安芸郡陸上選手権大会の中に位置付けて、盛大に行われる。今年度も安芸郡16小学校のうちの12小学校が母体となった12クラブとスポーツ少年団の2クラブを加えた14団体が参加した。

小学生にとっては、全国大会につながる地区予選としてだけではなく、陸上競技と出会うきっかけとなる、まさに、普及の面で素晴らしい大会となっている。このような大会の歴史を作ってくれた安芸陸協の役員の皆様を始めとする関係の方々の努力に敬意を表すとともに、今後とも大切にしていきたい大会であると感じた。

海田南小学校 石川 和明

中体連

今年の全中は分県の九州石油ドームで行われる。7月に行われる通信陸上、県選手権大会で標準記録を突破した選手が出場できるが、天候や風の状況によって記録が左右される。皆さんが天候に応援されることを心から祈っているが、しかし、本当に強い選手は、そういった周りの条件に左右されることなく自分のモチベーションを上げられる選手ではないかと思う。

5月23～24日広島ビックアリーナで行われた第3回県中学生記録会は、四種競技の全国大会指定大会となっていたが、府中町立府中中学校の2年の福部 真子(ふくべ まこ)さんが標準記録

を突破し、今年度の第1号資格取得者となった。昨年度、県陸協の選手育成の一環として1年生で全中大会を見学に行かせていただき、本人にも来年は全中に出場するんだという意識も大きくなったことが、今につながっているのではないかと思う。

来年、再来年を見据えて取り組ませてくれた関係者の方々には大変感謝するとともに、これからも継続していただきたい。中学生の皆さんが、夢と希望を持ってチャレンジする姿を期待している。

中広中学校 田川 司

高体連

インターハイの第一関門である地区予選が終わりに、広島県予選が行われる時期となった。個人種目においては誰でもインターハイに行くチャンスがある。しかし、たとえ高い能力を持っていても、練習環境や指導者がいない場合、その能力を伸ばしきれずに高校生活を終えることもありうる。そういう境遇にある選手は是非色々な練習会などに参加してもらいたい。

例えば、広島地区は、広島工大高校のグラウンドで、年6回の合同練習会が予定されている。呉地区においても、呉高専のグラウンドで、年4回の合同練習会が予定されている。西条農業高校では投擲練習会・記録会が、コココーラウエスト広島スタジアムでは、サタデー陸上教室が開催されている。個人単位でも学校単位でも気軽に利用していただきたい。

これらの練習会場に足を運べば、様々な種目においてよき指導者から専門的な指導を受けることができる。さらにそういう会場で練習することによって多くの仲間ができ、ともに切磋琢磨することによって、それが競技能力を高めることにつながる。能力があるものはそれを最大限に伸ばして、それをできるだけ大きな陸上競技大会で存分に発揮してほしいものである。

今年も広島で日本選手権が開催されるが、全国レベルで、また世界レベルで闘えるトップアスリートが広島県から多く誕生することを期待している。

井口高校 松崎 親男

学生連盟

5月15日(金)～17日(日)に、鳥取市布施のコーラウエストスポーツパーク陸上競技場で、第63回中国四国学生陸上競技対校選手権大会が行われた。あいにくの悪天候の中競技が行われ、非常に記録を出すのが難しい状況だったが、04年

の日本選手権で5つの日本新記録を出した競技場だということもあって、3種目で大会新が生まれた。

広島県の大学や広島陸協登録の選手も大活躍を見せ、男子砲丸投で14m36cmの大会新を出した広島経済大学の川崎勇斗選手が最優秀選手に選ばれるなど、広島県の学生のレベルの高さを実感した。今秋、松山で行われる第32回中国四国学生陸上競技選手権大会では、より多くの選手が入賞できるように、広島の大中学生で競技レベルを高めあうことを目標として努力していきたい。

中国四国学生陸上競技連盟広島支部 幹事長 広島修道大学 上杉 達也

実業団連盟

中国実業団陸上競技選手権大会が5月9日、16日、17日の2週に渡って三次市で行われた。

初日の男子5,000mでは、ジョセフ・ギタウ選手(JFEスチール)が大会記録に迫る13分41秒98で優勝し、翌週の10,000mでも、28分16秒02の好記録で二冠を達成する快走を見せた。また、両種目とも2位になったピーター・カリウキ選手(マツダ)も最後までジョセフ・ギタウ選手と先頭争いを展開し、大会を盛り上げた。

その他、入社1年目の佐々木徹也選手(中電工)が3,000mSCを制し、ジュニア1,500m・ジュニア5,000mでは、井平智之選手(JFEスチール)が二冠を達成するなど、ルーキー達の活躍も見られた。

広島県実業団陸上競技連盟 事務局 中電工 藤本 大輔

マスターズ連盟

第27回広島マスターズ陸上選手権大会が6月7日に「びんご運動公園」で開催された。今年度は「青春・再びマスターズ陸上」のもと、203名の参加人数となった。

かつての記録は望むべくもないが、それぞれの置かれた環境の中で技を磨き、健康づくりと併せて生涯スポーツの推進に努めています。そして何よりも走友との再会を心待ちにしている。

8月1～2日には、岡山県の「桃太郎スタジアム」で中国マスターズ陸上選手権大会、9月19～21日は名古屋「瑞穂陸上競技場」で全日本マスターズ陸上選手権大会も開催される。

広島マスターズ陸上も30余名の新会員を迎え、活気あるシーズンを迎えた。正に「青春の灯は燃ゆる」である。アンツーカーで汗じた皆さんと、全天候トラックで再会したいものだ。

マスターズ連盟副理事長 前田 征四郎

三宅勝次氏 日本陸上競技連盟 副会長に就任

三宅 勝次(みやけ・かつじ) 65歳

広島市安芸区在住

広島経済大学 教授

●研究テーマ:陸上競技選手の体格と体力トレーニング 他

●研究分野:生理学一般、環境生理学(含体力医学・栄養生理学)、スポーツ科学(機関内共同研究)

昭和60年～現在 広島陸上競技協会副会長等

平成4年～現在 広島県体育協会理事

平成21年 日本陸上競技連盟副会長



中国新聞刊 (2009年5月5日付け) から転載

佐藤敦之選手 ベルリン世界選手権マラソン代表に決定



このたび、2009年ベルリン世界選手権マラソン代表に選ばれて嬉しく思います。昨年の北京オリンピックでは、最下位(76位)に終わり、悔しい思いをしました。

今まで味わったことのない屈辱感を味わいましたが、先日4月26日におこなわれたロンドンマラソン(8位、2時間9分16秒)で復帰できたことは、私の競技人生のなかで大きな財産となり、大きな自信となりました。

ロンドンマラソンに向けて、今年の1月から本格的に練習を開始しました。練習するに当たって、自分の体調を優先してトレーニングを作成し、確実に消化していくことを心がけました。結果的には以前の7割程度の

練習量でレースに臨むことになりました。

また、数多くの試合に出場し、スピードとレース勘を磨くことを心がけました。良い意味で集中するところと休むところのメリハリができてよかったと思います。

今の自分自身の調子を見極めながら、新鮮な気持ちでマラソンに臨めたことが、良い方向に向かって行きました。北京オリンピックの悔しさを少しでも払拭できた気がします。



ベルリン大会では、万全の体調でスタートラインに立ち、世界の強豪たちと対等に勝負してきたいと思います。

また「オリンピックの借りはオリンピックで返す」を合言葉に3年後のロンドンオリンピックに向けて頑張りたいと思います。

これからも中国電力 佐藤敦之を宜しくお願いします。

青少年の夢を応援します！

青少年健全育成 協力企業

- 株式会社サタケ
- 中国電力株式会社
- 広島電鉄株式会社
- 学校法人石田学園
- 旭化成株式会社
- 広島ガス株式会社
- 株式会社いとや
- 株式会社中電工
- 広島駅弁株式会社
- 株式会社福屋
- オタフクソース株式会社
- 株式会社もみじ銀行
- 積水ハウス株式会社
- 株式会社イズミ
- 奥アンツーカー株式会社
- 広島総合警備保障株式会社
- 株式会社広島銀行
- 中外テクノス株式会社
- 財団法人国際科学振興財団

(順不同)

編集後記 広陸協 BLOG

広島陸協として今年一番のイベント、日本選手権がよいよ始まる。この大会に向けて、東川専務理事を中心に、陸協をあげて取り組んだ。組織としては、今年度は特別委員会をおこし、浜崎委員長がリーダーシップをとる中、各部署と連携をとりながら、ハード面とソフト面どちらの整備も進めてきた。例年通りの竹林先生が講師となつての審判講習会で日本選手権に向けて熱意を感じた。

会場の機器のリニューアル、グラウンドの整備などで円滑に大会が運営できるよう取り組んできた。あとは選手を迎えるだけ。選手の活躍を祈り、広島陸協として支えていきたい。(F)

New Hope キラリ Young Athlete 未来のナンバーワン!!

かさに さきの かさに かなの
笠谷 咲乃・笠谷 奏乃(広島市立伴南小学校6年)
生年月日:平成9年5月25日(12歳) / 所属:広島ジュニアオリンピッククラブ
笠谷 咲乃:身長152cm・体重40kg
ベスト記録 / 5年:100m 14秒32 6年:100m 13秒93 全国小学生広島市予選優勝
笠谷 奏乃:身長152cm・体重40kg
ベスト記録 / 5年:100m 14秒70 6年:100m 14秒15 織田記念3位



広島ジュニアオリンピッククラブに入部したのは5年前で、二人とも小学1年生でした。一卵性双生児で見分けることが出来ないほどそっくりでした。

入部のきっかけは、副会長の日山君代先生と、母は教え子、祖母は同じ学校へ勤めていたという縁でした。

入部当初は体力もなく、ウォーミングアップの足の運びもままならないほどで、「他の学校のお姉さんと会うのが楽しみで通っていた」と母は言います。指導者から見ると、おとなしく、あまりしゃべらず、楽しんでくれているのか分かりませんでした。いつやめるかと心配もしました。しかし、黙々と練習に励み、胸に秘める闘志は私たちの予想を超えていました。それは、いつも一人ではなかったからです。いつも二人で行動し励まされて来たからだと思います。

また、仲間が良いがライバルでもあるのです。こうして、お互いが支え合い、競い合っているうち、みるみるスピードが付いてきました。そこに、同クラブの上新さんというライバルも現れました。

5年生の時、全国大会への切符は1枚だけです。3人の争いです。予選も準決勝も上新さんがトップでした。このまま行かかと思われましたが、勝ったのは咲乃さんでした。

奏乃さんはこのときの悔しさを忘れてはいないでしょう。

昨年度、咲乃さんの全国大会は、全国の厚い壁に打ちのめされました。しかし「来年、もう一度全国にリベンジをしに行く」と決意を新たにしました。奏乃さんも応援として客席から選手の勇姿を見て、「来年は、必ず選手として行く」と気持ちを固め、それぞれの思いを胸に同じ目標を目指して頑張ってきました。その悔しさをバネに、6年生では「リレー(みんな)で全国に行こう。いや、行くだけでなく全国で決勝に行こう」というでっかい夢に向かって、決意を新たに練習に取り組んでいます。二人とも入部してから今まで一度も練習に行きたくないと言ったことはないそうです。全国小学生広島市予選大会では55秒66で優勝し、着実に夢の実現に近づいています。なにか、とんでもないことがおこりそうな気がします。

広島ジュニアオリンピッククラブ総監督 藤本 法生



練習中のマナーについて

汗ばむ気候となり、各年代ともトラックシーズンの季節になりました。自己の記録に挑戦すべく、競技場内では様々な団体が色々な種目に分かれて毎日懸命に練習に励んでいます。フィールド内では投てき・走高跳、トラック1・2コースでは長距離、メインコースでは短距離、跳躍コースでは走幅跳など、多くの選手が練習をしているため、気付かないうちに誰かの練習の邪魔をしている事がよくあります。不注意でコースに入り、実際に選手同士がぶつかり怪我をする事もあります。

みなさん、それぞれの大会で好成绩・自己記録更新を目指し、一生懸命練習しているのにこのような事で怪我をして大会に出られない、あるいは出て本来の走りが出来ない状態になってしまったのでは、何のために毎日苦しい練習に耐えて頑張ってきたのかわからなくなります。このような事にならないように、普段から走っている選手、跳ぼうとしている選手、投げようとしている選手の妨げにならないように、競技場内に入っている人は周りに気を付けなければいけません。

また、苦しい練習を終えただけで周りを見る余裕の無い選手、おしゃべりに夢中で選手に気付かずコース内を歩いている選手には、指導者あるいは周りの仲間が声をかけてあげる必要があると思います。「コースあぶないよ!」それだけで防げる怪我もあるのです。

みんなで使う競技場です。お互いに気を遣いながら、お互いが安全に練習に集中できる競技場にする事、それが競技者として最初に覚えるマナーではないでしょうか。